鈴鹿市日本共産党後援会
後援会だより

2016年11・12月号　【部内資料】

鈴鹿市日本共産党後援会　鈴鹿市西条4丁目144
電話 382-5709　FAX382-7689
鈴鹿市日本共産党後援会ホームページ http://jcp-suzuka.jimdo.com/　パスワード　suzuka2020

特集　介護・高齢化社会を考える

介護は予防が大切

「脳梗塞で手術を受けたが退院を迫られている」「連れ合いが認知症のようだ」などの相談がふえています。また、「介護保険代を払ってきたのになぜサービスが受けられないのか」という怒りの声も寄せられています。

いま「地域包括ケア」という言葉が盛んに叫ばれています。このなかで、介護予防と生活支援は「住民自身や専門職以外の担い手を含めた多様な主体による提供体制で」という自助・共助の原則が強く打ち出されています。要支援などの軽度者を介護保険の対象から外す方向です。

高齢者人口の増大と核家族化の進展という社会背景があります。鈴鹿市も高齢化率２３．３１％、認定率１６．６０と年々増大しています。

このままいけば介護保険制度はパンクする、軽度者は外す、サービスは抑制する。これではますます重度化せざるをえません。予防に力をいれて医療費を削減できた沢内村（岩手県）の経験のように、介護も予防が大事です。私はここに思い切り予算をあてるべきだと思っています。

厚生労働省は「高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制の構築」と定義しています。この崇高な理念を貫いてもらいたいものです。

（一般社団法人福祉医療事業ネットワーク・三輪）

施設に入所できてよかった

職員のみなさんに感謝

11月23日に88才の誕生日を迎える母は、12年近く施設で生活しています。70才過ぎから始まった認知症の症状がだんだん進行し、父の入院と重なって施設でお世話になることになったのです。12年の間に何カ所も施設を変わり、今は四日市市内の特養に入所しています。年々記憶が昔に戻っていき、今は戦中・戦後あたりでしょうか。日によって「日本は（戦争で）どうなるのかなあ？」と心配したり、「日本はええ国になったなあ。こんなええ所に入れてもらえて。」と嬉しそうにしています。もちろん、目の前の私が自分の娘とは思っていません。子どもを育てたことも忘れています。

そんな母の姿に、ときどきさびしいなあと思う私ですが、施設の職員のみなさんに対しては本当に感謝の気持ちでいっぱいです。家にいたころの母は、認知症の初期ということもあって、カッとなって父や兄家族に当たって大変だったそうです。施設では、外にいると思っているからか、わがままを言わずニコニコ過ごしています。（職員のみなさんの対応も適切なのだと思います。）施設に入所するにあたっては、費用もとても重要です。最初はケアハウスに入所したので、父の年金はほとんどこの費用に消えていました。父は4年前に亡くなりましたが、母が特養に移ることができたので、母の少ない年金でも今のところまかなうことが出来ています。

「誰もが、必要に応じて、適切な介護を、負担できる費用で受けられる」本当に大事なことだと感じています。本人と家族の平穏のために。

（伊船町　石田喜代子）

長生きするって？

私の母は84歳で、8月から再び一人暮らしを始めた。13歳で終戦を迎え、南島町で原発反対を訴えてきて、出来れば死ぬまで田舎で暮らしたかったと思う。病気の父と80年近く住み慣れた地を離れ四日市に引っ越してきたのは6年前だった。父が亡くなってからも1人で暮らしていたが、息子家族の意向でサービス付き高齢者住宅に入居した。

しかし、それは母の希望する生活ではなかったようだ。食事つき、風呂も入れてもらえるが自分でやりたい気持ちが強い母は「サ高住」の生活にイライラするようになり娘の私に文句や不満ばかり・・・。

話し合いを重ねた結果、歩けなくなったり、認知症になったりしたときには施設へ入ることを条件にアパートで暮らすことに！本当にひとりで大丈夫か？心配で毎日、様子を見に行っていたが、2ヶ月たった今いきいきとした顔になり、自分で買い物に行き、食事を作り、ベランダに花を植え、縫い物も始め楽しんでいる。もちろん全部一人ではできないが・・・。

自分自身も60歳を過ぎ老後を真剣に考えるようになった。年金はどんどん減らされ、介護制度は改悪される中、高齢者にとっても家族にとっても生きにくくなってきている。「長生きしてよかった！」と思える世の中はすべての人が暮らしやすいはずだ。そんな世の中にするために微力ではあるが頑張っていきたい。介護は大変なことも多いが母の笑顔を見ると勇気づけられる。

（自分の老後がとても不安なチカちゃん）

「入院病床を減らさないで」

医療費を削減するためとして、三重県では地域医療構想計画のなかで２９００床の病院ベッドを削減すると聞きました。私の妻は長期にわたり難病を患い、通院を繰り返してきましたが、ある時に高熱を発し、救急搬送されました。入院中には、退院などまだまだと思う段階から「当院は急性期の病院です。次に来る患者さんのためにベッドを空けておかなければなりません」等と、ドクターやケースワーカーさんから連日のように退院の話がありました。やむなく退院したものの、容態は安定せず、再び別の病院へ救急搬送をされ、９か月の間に３度、転院しました。このような状態なのに三重県はさらにベッド数を減らそうというのです。困るのは患者だけではありません。ドクターもナースも同じだろうと思います。これから高齢化がますます進むなかで病院からベッドが消えたら、私たちは「医療難民」にならざるをえません。絶対にやめてください。

（白子　向井正美）

１１月２６日に鈴鹿で介護講演会

来たる１１月２６日、「安心して介護を受けるには」という講演会があります。

第１部は希望の里たんぽぽ施設長の横山景一さんが「鈴鹿で介護を受けるには」と題して市内の介護事情を解説。

第２部は元埼玉県済生会栗橋病院副院長の本田宏さんが「介護崩壊のルーツをさぐる」として介護・医療をめぐる国の動きを解明。

本田さんといえば「お笑いタレント」顔負けのユーモアあふれるお話が好評。５月に津で行った講演会に参加した人たちが今度は鈴鹿でもと、４ヶ月前から準備をしているものです。

１１月２６日（土）１３：３０～
鈴鹿市労働福祉会館
（中央通り・図書館交差点近く）
資料代３００円（お茶つき）

オープニングは北川千代子さん（名古屋フィルハーモニー交響楽団団員）のバイオリン演奏。日本の叙情歌を美しく奏でます。

介護に関心のあるみなさん、是非ご参加下さい。

（本田宏鈴鹿講演会実行委員会　吉田一男）

はしづめ圭一の
はじめの一歩

出生率２．８１の街
岡山・奈義町

　秋晴れの１０月１０日、岡山県奈義町に行きました。鈴鹿から名神高速を２時間、尼崎で友人を乗せ、中国道を２時間で奈義町の友人宅に着きました。今回で３回目、これまでの２回は、ここを中継点に、大山登山とか山陰の旅を楽しみましたが、今回は１泊２日でゆっくり過ごしました。

　３人は同じ歳ですが、奈義町の友人は町議６期目のベテラン議員。これまで町政の話はあまりしませんでしたが、今回は私が議員になったこともあり、いろいろ聞いてきました。

　放課後児童クラブや中学校給食などを、住民要求運動の力で実現してきたこと。子ども医療費は高校卒業まで無料、各種ワクチン接種への補助など、町独自に１８才までの子ども一人に、平均で年間９万６千円の支援をしていること。また、若者住宅を建設し、雇用促進住宅を安価で購入、低家賃で提供しているなど、定住のための施策も充実。住民要求を積極的に取り入れて子育て応援の街づくりをすすめ２０１３年に、町として「子育て応援宣言」を出したこと。そして、２０１４年の出生率が２．８１で、全国１になったこと。鳥取との県境の中山間地で人口６２００人の小さな街だが、町民の多くが「奈義町は子育てが充実している」ことを自慢に思い、誇りが生まれてきたと思う・・・など、素晴らしい話を聞くことが出来ました。

（市議会議員　橋詰圭一）

奈義町の山と田んぼ

石田 秀三の かけある記

伊船町の秋祭り

　秋は各地でお祭りが行われています。わが伊船町東自治会でも、10月9日に秋祭りが行われました。私は今年、伊船新田の組長として、祭りの準備から片付けまで全体を通して取り組みました。自治会役員、老人会、婦人会、青年団、それから親交会（青年でもなく、老人でもない有志の会）のメンバーが一体になって、会場のテント立て、やぐらの組み立てから店びらき、演芸会、踊りなどをテキパキ進めます。ふだんは閑散としている町内も、祭りの日は沢山の人が出て、公園は大賑わいです。

夕方からの演芸会、以前のようなカラオケはなくなり、今は子どもたち、青年の踊りや演奏が中心で、あまり中高年の出番がありません。そこで私は中高年を代表してエントリー、ギター持って歌いました。曲は「サライ」、谷村新司になり切ったつもりで歌いましたが、客席からのヤジに負けました。もう1曲「うちのお父さん」、南こうせつのようないい声は出ませんが、拍手もらっていい気分でした。

“ 汗を拭いて　お茶を飲んで　腰を伸ばせば　お父さん　ニッコリ笑う　ニッコリ笑う　あした天気になあれ ”

（鈴鹿市議会議員　石田秀三）

私のおすすめ 簡単レシピ

大根もち

蒸して焼いたりもするらしいですが
簡単な作り方で
・大根おろし　1／2本分（350gくらい）
　少し水気を切って
・片栗粉　大さじ5
・ねぎ
・紅生姜
・とろけるチーズ
・じゃこ（干しえびでも、カニかまでも、ツナでも
　　ハムでも）

ごま油でこんがり焼く
大根おろしと片栗粉以外は適当です。
アレンジしてみてください。
ポン酢などをつけてどうぞ。

サツマ芋ごはん

お芋は皮付きで1～2cmのサイの目に切って
塩水につけて水を切り、お米の上にのせて炊く。
塩水につけることで、塩味がつき、煮くずれもしにくくなるそうです。

お米を少しもち米にかえると、もっちりおいしいです
栗やギンナンも入れると上等になりますが、おいしいサツマ芋なら「栗よりうまい…」です。
黒のいりゴマをふればカンペキです。パラパラと何粒かのっているだけで幸せが倍増します。

（Y子）

「市民にこれだけの損害を与えてまでお金が欲しいのはどうしてなの」

森川ヤスエの こころに夢を

NHKスペシャル「マネーワールド」を録画で見ました。

いま私たちの国で安倍政権が躍起になって進めようとするTPP参加の行き着くところが見えるようで、とても恐ろしくなりました。企業と国家の契約「ＩＳＤＳ条項」を使って国家が企業に訴えられる。109か国で７００の訴訟が行われているという。エクアドルではその裁判が8件。訴訟の賠償金が国家予算を圧迫し、国民を苦しめているという。訴える企業は「エクアドル国家GDPの2.5～3倍の経済力を持っている」という。このような苦しみを抱えるエクアドル政府役人がつぶやいた声「多国籍企業がその力を乱用した時、小さな政府が身を守るメカニズムが存在しない」「市民にこれだけの損害を与えてまでお金が欲しいのはどうしてなの」。

このシリーズでは資本主義の未来を考えるというテーマで世界中の貧富の格差を追っていた。世界中の富裕層と呼ばれる62人の資産が世界の人々36億人の資産に匹敵するというのです。その格差は「一人5万円」と「一人3兆円」。世界中で際限く進む格差。しかしスペインの小さな村マリナレダでは人間が生きていくうえで必要な「衣食住」はビジネスの対象にしないと最低限の生活にはお金がかからないよう競争に制限をとりいれて、経済活動が活発になり人口は増え、村の収入も増えているという。

人間社会の未来もまた見えるようです。

（市議会議員　森川ヤスエ）

NHKスペシャル

随想

地方紙を読んでみた

先日、旅先の駅の売店で地方新聞を買ってみた。それは「福島民報」という文字どうり福島県の地方紙である。松本清張の小説に「地方紙を買う女」というのがあるが、「地方紙を買うおやじ」ではちょっと絵にならないか・・・。地方紙を読んでみると同じ日本に暮らしているとはいえ、その地方によって関心事はずいぶん違っているものだと感じる。

その日（10月19日）の一面トップ記事は福島原発で出た除染廃棄物の中間貯蔵施設建設に関する記事だった。社説も原発関連、社会面でも東電のいい加減さを告発する記事が目立った。ずいぶん、ずけずけ言う新聞があると思ったものだ。原発の地元というのもあるが、そこには朝日、毎日など大手メディアといわれる大新聞社と地方を基盤にする新聞社との報道に対する姿勢の違いのようなものがあるのではないだろうか。

大新聞社の幹部は安倍総理とよく会食（安倍さんのおごり）をするといわれる一方で地方紙の幹部が総理と一杯飲んだりという話は聞かない。その違いは紙面作りに大きな影響をあたえるはずだ。飲み食いさせてもらっていたら、そりゃ耳の痛いこと、都合の悪いことは書けない（書かない）よねえ。

支持率が高いといわれる安倍内閣だが、それはちゃっかり手なづけた大手新聞の報道自主規制に守られているからなのか。

（T）

私のふるさと

第５回 遠藤智子さんにインタビュー

雪かき
１７歳の私

私の故郷は青森県黒石市です。農家に生まれ２０歳すぎまでそこで暮らしました。雪深いところです。小学校の体育の時間は毎日スキーでした。さぞ上手だろうって？だめだめ私はスキーがあまりすきーじゃなかったので・・・。写真は雪かきをしているところ。玄関の屋根まで雪が積もります。

卒業後、地元の縫製工場で１０年働きました。だから今でもミシンは得意ですよ。

故郷へは年に一回、お盆やねぶたの時期に帰ります。

立ちねぶた
撮影；遠藤一男

弘前城の桜
２０歳の私

青森市や弘前市のねぶたが大きくて有名ですが、吉　幾三さんの出身地、五所川原市の「立ちねぶた」も迫力があってすてきですよ。今年、私もはじめて見ました。

そうそう、隣町の田舎館（いなかだて）村は「田んぼアート」で有名ですね。今年は「真田丸」が見事に描いてありましたよ。

他にも津軽りんご、津軽三味線、こぎん刺し（刺繍）、こけしなど自慢したいものはいっぱいありますが、今回はこれくらいで・・・。

田んぼアート２０１６
撮影；遠藤智子

秋の後援会バス旅行

11月20日（日）
杉原千畝記念館ほか

お楽しみに

雇い止めで1200万円支払い命令

津地裁、ジャパンレンタカーに

【津】総合サービス企業大手のジャパンレンタカーから雇い止めを受けたアルバイト従業員の辻貴光さん（四四）＝津市＝が、社会保険未加入の損害金など計約千五百万円の支払いと地位確認を求めた訴訟の判決で、津地裁の瀬戸さやか裁判長は二十五日、辻さんの地位を認め、同社に計約千二百万円の支払いを命じた。

判決では、辻さんを雇い止めにする客観的な理由を欠いていると断定。平成二十六年十二月から二十二カ月分の賃金の支払いなどを命じた。一方で、社会保険に未加入であったことへの精神的苦痛については、労働契約を結ぶ時点で抗議した証拠が不十分とし、慰謝料請求を認めなかった。

判決後に津市丸之内の三重合同法律事務所で会見した原告の辻さんは「認められてうれしい。職場に戻りたい」と語った。加藤寛崇弁護士は「大筋でこちらの請求が認められた」とした。

辻さんは、平成四年から同社でアルバイト従業員として勤務。同二十一年二月から鈴鹿店で働いていたが、同二十六年十月末頃に体調不良で二週間ほど休んだところ、同社から雇い止めを告げられた。

１０月２６日付「伊勢新聞」

編集後記

▼１０月２６日付「伊勢新聞」です。▼辻さんはジャパンレンタカーで２２年間（最後の５年間は鈴鹿店）非正規社員として働いていました。▼深夜、まともな休憩も取れない中での勤務、とうとう過労で２週間休みました。▼それに対して会社は「もう来なくていい」と「雇い止め」（解雇）。▼非正規であっても長年働いた人を一方的に解雇することは許されません。▼鈴鹿市内で数回にわたって行われた団体交渉には、鈴亀労連からも応援に参加しました。▼会社側はあくまで解雇は正当と主張しましたが、津地裁は解雇は不当とし、１２００万円の賃金支払いを命じました。▼労基法を守らない企業に対する正義の闘いが勝利しました。亀山自動車学校不当解雇事件（今年１月勝訴）に続き２連勝。正義は勝つ！

（よ）